

ソーシャルワーカー養成導入教育としての「心理学」の意義

福田 雄 一¹

Significance of Giving the “Psychology” Class as an Introductory Course for Social Worker.

Yuichi FUKUDA

1 はじめに

複雑・多様化する社会にあって、対人援助職の重要性はさらに高まっている。(財)日本臨床心理士資格認定協会の指定する「臨床心理士」を養成する大学院や、福祉系の大学・専門学校等、対人援助職を養成する教育機関も増えた。医学教育においても知識だけでなく技術・態度を含めた総合的な臨床実践能力を評価する試験 (Objective Structured Clinical Examination ; OSCE) が一部の大学で試験的に導入されており、薬剤師や栄養士の養成教育においても服薬指導、栄養指導の実践に求められる対人援助能力の向上が課題とされるようになってきた。

教育機関内におけるカリキュラムの設計や実習教育における現場との協力、外部評価の最たる指標となる資格試験への対策、それらを適切に運営する人的資源の確保など、教育機関の抱える課題は多岐にわたる。そのうち、養成教育の展開過程の初期段階に位置づけられる課題のひとつが、導入教育をいかに行うかということである。

社会福祉教育の導入期においては、ソーシャルワーカーとしてのアイデンティティを育成することの重要性が認められていながら (日本社会事業学校連盟, 2003), 各養成機関のカリキュラムの現状としては、社会福祉専門科目 (社会福祉原論等の基本科目, 社会福祉援助技術論等の方法・技術科目, 障害者福祉論等の分野科目) よりも関連科目 (法学, 社会学, 心理学等) の方が低学年に多く配当されている。本学においても、社会福祉士・精神保健福祉士国家試験の受験資格を取得するための指定科目として法学, 社会学, 心理学が1年次に配当されている (これに対し, 社会福祉専門科目は社会福祉概論の1科目のみである)。受験資格を取得するだけならば, 法学・社会学・心理学のうち1科目を履修すればよいことになっているが, 国家試験には3科目とも出題されるため, 卒業の要件とはしないものの, 3科目とも履修するように指導しているのが現状である。

社会福祉専門職を志して入学したとしても, 1年次に関連科目の学習が主となってしまうと, 社会福祉に対する動機づけやソーシャルワーカーとしてのアイデンティティが育たないまま進級することになってしまう。後の学年になって現場での実習に参加した際, 「資格がほしいだけの人はいない」といった (現場で働く専門職としては当然の) コメントに直面し, なぜ自分が福祉専門職を志すのかという問いを改めてつきつけられることになる。高校卒業時の進路選択において, 専門

¹ 広島文教女子大学人間科学部人間福祉学科講師

職に対する動機づけが明確でない場合、この傾向がより強いのではないだろうか。

本稿では、ソーシャルワーカーを養成する大学の学部教育において、導入期のカリキュラムに位置づけられている「心理学」の意義について、筆者の実践をふりかえりながら考察することとしたい。

2 「心理学」の位置づけ

社会福祉士・精神保健福祉士の国家資格は厚生労働省によって管轄されており、養成施設の設備・人員の基準、授業科目やその目標・内容、実習施設等に関するスタンダードが設けられている（一定の範囲内で科目の読み替えが認められるなどの自由度はあるが、教育機関や担当教員の判断で内容を独自に変更することは難しいようである）。両資格とも、国家試験の受験資格を取得するための「指定科目」が定められており、表1は指定科目の一つである「心理学」の授業で達成されるべき目標と展開されるべき内容を示したものである。

授業科目の目標や内容は、かなり詳細にわたって示されており、心理学の一般的な学問体系としては偏りなく、しかし基礎的な領域に関する確実な理解は求められていることがわかる。これらの理解を現場での実践にどのように結びつけていくのか、また国家試験(マークシート方式)での出題は、単に宣言的な知識のチェックにしかならないのではないかとといったことが課題に挙がっている。

表1 「心理学」の目標および内容

【目標】

- 1 心理学の概要を理解させる。
- 2 乳幼児期・児童期・青年期・老年期等人間の発達段階のそれぞれの時期に特有な身体的、心理的特徴について理解させる。
- 3 心理学理論による人間理解とその技法の基礎について理解させる。
- 4 心理的援助技法の概要について理解させる。
- 5 社会福祉士に必要な内容について理解させるよう留意する。

【内容】

- 1 人間の心理学的理解
 - 1) 欲求・動機づけと行動
 - 2) 感情・情動
 - 3) 感覚・知覚・認知
 - 4) 学習・記憶・思考
 - 5) 知能・創造性
 - 6) 人格
 - 適応と適応異常
- 2 人間の成長・発達と心理
- 3 人間理解のための心理学理論と技法
 - 1) 基礎理論
 - ① 精神分析
 - ② 行動分析
 - 2) 測定と診断
 - ① 発達
 - ② 知能
 - ③ 性格
- 4 心理的援助技法の概要
 - 1) 心理療法（個別面接法・集団面接法）
 - 2) 家族心理療法
 - 3) 行動療法

出典：社会福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容並びに介護福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容について（昭和63年2月12日社庶第26号厚生省社会局長通知，平成11年11月11日社援第2667号にて改正）

注：精神保健福祉士養成施設等における授業科目の目標及び内容も、ほぼ同様のものが示されている。

3 授業実践

筆者がこのほど担当した「心理学」は1年生を対象とした専門科目であり、通年の科目として開講されている。各回の授業の概要を表3に示した。各回の授業終了時にはメモ用紙を配布し、質問や意見を記入してもらった（出欠の管理にも用いた）。また、後期試験では、通常の試験問題に加え、自由回答（採点対象外）として「福祉専門職をめざす人が心理学を学ぶ意味」について記述を求めた。

表3 「心理学」授業概要

回数	授業項目	授業内容
1 (4/16)	イントロダクション	授業概要の紹介
2 (4/23)	福祉領域における心理学の意義	対人援助職の専門性と心理学との関係
3 (4/30)	心理学の歴史	心理学の成立と展開、現代の心理学の諸分野
4 (5/7)	心理学の方法	心理学の科学性、観察法・実験法・調査法 等
	休講（大学行事）	
5 (5/21)	動機づけ	動因と動機、内発的動機づけ、原因帰属、葛藤 等
6 (5/28)	感情・情緒	感情・情緒の発達的变化、分化
7 (6/4)	感覚・知覚・認知(1)	感覚の諸相、知覚の特性
8 (6/11)	感覚・知覚・認知(2)	認知機能、脳の機能分担
9 (6/18)	学習	条件づけ、社会的学習、臨床的応用（行動療法）
10 (6/25)	知能	定義と構造、発達的变化、知能の規定因、知能検査
11 (7/2)	パーソナリティ	類型論と特性論、人格の規定因
12 (7/9)	適応	ストレスとストレッサー、防衛機制
13 (7/16)	社会的行動	ステレオタイプ、リーダーシップ、流言など
14 (7/23)	前期試験	
15 (10/1)	発達(1)	発達の概念規定、遺伝と環境の関わり
	休講（大学祭）	
16 (10/15)	発達(2)	発達の一般的原則、発達の研究法、アセスメント
17 (10/22)	発達(3)	発達課題、生涯発達
18 (10/29)	発達(4)	高齢者の心理、痴呆の理解
19 (11/5)	障害を理解するさまざまな視点	障害の定義やレベル、心理的な問題との関係
20 (11/12)	身体障害(1)	視聴覚の障害、運動機能障害、慢性疾患
21 (11/19)	身体障害(2)	障害受容（VTR資料「音のない世界で」提示）
	休講（大学行事）	
22 (12/3)	知的障害・発達障害(1)	精神遅滞、自閉症スペクトラム
23 (12/10)	知的障害・発達障害(2)	学習障害、多動性障害など
24 (12/17)	精神障害	正常と異常、おもな精神障害
25 (1/7)	心理学的アセスメント	さまざまな心理検査の紹介
	休講（大学入試センター試験）	
26 (1/21)	心理学的援助	さまざまな心理学的援助技法の紹介
27 (1/28)	後期試験	

4 導入教育としての「心理学」の意義

(1) 学生のコメントから

学生のコメントで最も多くみられたのは、援助対象者を適切に理解したり、援助関係を形成する上で心理学の知見が役に立つということである。心理学は行動を科学的に理解する学問といわれるが、客観的に観察可能な行動の背景にある心理的な過程（欲求、感情、葛藤など）を理解することは、対象者のニーズを適切にとらえることや、対象者と相互に信頼関係を形成する上で欠かせないものである。

また、生涯発達やさまざまな障害について学んだことにより、ソーシャルワークの主な対象となる高齢者や障害者に関する具体的なイメージを形成することに役立ったという意見もあった。子どもの発達に関しては、学生自身の過去の経験が照合枠となったり、身近な乳幼児や親とのやりとりの中である程度の理解が形成されているが、精神障害や発達障害に関しては授業を通して初めて知ったという学生も少なくなかった。われわれの生活する社会は、乳幼児から高齢者まで、また障害をもつ人ももたない人もおり、多様な人びとで成り立っているということを改めて認識する機会になったようである。同じ病気や障害でも、「一人ひとりの違いや、習ったこととの違いはあるかもしれない（教科書的な対応だけでは限界がある）」が、「一般的なことをしっかりと理解しそれを基盤にする」ことで、「一人ひとりにあった対応を考えていく」ことが可能になる。そのことは、「利用者が気持ちよくサービスを受けられる」ことにもつながる。「授業はそのためのきっかけでしかなく、実際にいろいろな人びとに接して学ぶことも大切」という記述もあった。

その一方で、援助対象者だけでなく、（援助者となる）自分自身の自己理解にも役立つという意見があった。自分自身のパーソナリティや対人関係の特徴等を理解しておくことは、援助の偏りを防ぎ、そのことが結果としてクライアントの福利に貢献することになる。このような視点をふまえた支援は、必然的に多様で多角的なものとなり、対象者の心理的な成長・発達の可能性を閉ざすことのない支援が可能となる。

また、援助者の姿勢に関するコメントとしては、「内面のすべてを理解することができなくとも、理解しようとする姿勢を示し続けること」や、それと同じように、「単純に考えただけでは解決しないこともたくさんあるが、考え続けようとする姿勢を示すこと」が重要なのではないかといった記述があった。悩む、揺らぐ、ジレンマを感じるといったことは、一般的には否定的・不適応的な意味でとらえられるが、対人援助職の専門性を獲得することにおいてこれらの気づき（体験をふりかえり、意味づけ、課題形成へ至る内的過程）は非常に重要であると考えられている。

(2) 援助者としての自己形成・検討

岡村（1995）はカウンセリングの学習体系を「理論学習」「体験学習」「カウンセリング実践」にわけているが、これに倣ってソーシャルワークを学ぶ体系を「制度や理論の知的学習」「演習、現場実習」「ソーシャルワーク実践」であると仮定し、「心理学」の果たす役割について考えたい。

人間理解のための理論や援助技法を知的に学習したり、ソーシャルワークの対象となる人びとや、

将来援助者となる自分自身を理解するための機会を「心理学」が果たしているであろうことは、学生のコメントからも読みとることができる。ただし、知的な理解をそのまま援助関係にあてはめることには無理がある。佐治・岡村・保坂（1996）は、カウンセリング学習のヴァリエーションに関して、次のように述べている。

この際、もし幸運なことに、どんな具体的な学習も自由に選べるとしたなら、自分がなぜまずコレをやるのか、次に何をやろうと思っているのか、そのあたりの自分自身のありようについてつかむようにしてみたらどうか。要は、ことカウンセリング学習に関して言えば、アレコレの学習をした、体験をした、知識を得たということではなく、それぞれの学習を自分の体験過程に照合し、その体験の意識化を目指す中で進められたものでなければ、カウンセリングの学習としてはほとんど意味をなさないということである。

「心理学」の授業が講義形式で行われているという現状から、体験の照合という作業は学生個々の姿勢に任されているのが実情であり、対人援助専門職の知識や技術、態度・価値観を獲得するための、ソーシャルワークの領域における「体験学習」は、主に演習科目や実習科目の中で行われているということになる（学生によっては、ボランティア等の活動を行っている者もいる）。しかしながら、「心理学」が導入教育の一端を担うことを考え合わせると、上述したような学習体系や、体験に裏打ちされた理解の重要性、いわば4年間の学びの見取り図や心得を授業の中で示すことは、学生自身の「いま受けている授業が、4年間で学ぼうとしているソーシャルワーク全体からはどう位置づけられるのか、また自分自身にとってはどんな意味をもつのか」という姿勢を促進するのではないと思われる。

5 今後の課題

学生のコメントをふりかえると、筆者が意図していた以上に学生たちは、対人援助職をめざす上で心理学を学ぶ意義を自覚してくれていたようである。しかしながら、対人援助のうちの、特に社会福祉への導入ということが十分に意識されていたとは言い難い。ソーシャルワークとカウンセリングとの共通点・相違点等、「社会福祉援助技術論」等の科目との関連を意識させながら授業を展開することが求められるだろう。

また、時間的な限界はあるものの、発達障害に対する理解と対応など、学生自身にもあまりなじみがなく、かつ今後の実践において重要視されているテーマをより積極的に取り入れていくことが求められるだろう。また、授業の前半部分で基礎的な分野に時間がかかりすぎてしまい、最後の「心理学的アセスメント」「心理学的援助技法」については概略を紹介するにとどまった。これらの内容は、本学の場合「臨床心理学」「カウンセリング」「心理検査法」等の科目においても学ぶことができるが、それらの科目との接続をどのように考えていくかが今後の課題である。

「心理学」の全体が理解できるまでは、なぜこの科目を学ぶのかという意義がよく理解できてい

なかったというコメントもみられた。初期のイントロダクションの段階では、授業内容の概要を示すだけでなく、なぜ援助者をめざすのか、なぜ心理学を学ぶのか、対人援助職に求められる専門性とは何か、といった問いを示すなどして、知識の一方的な伝達に終わらせないことが肝要である。

また、高校での教育と大学での教育の接続ということを考えると、自ら課題を発見し学ぶという姿勢がより強く求められ、そのことで混乱を感じる学生も少なくないようである。このことは学生層が次第に多様化していることとも関連するが、ノートテイキングや調べもののしかた、新聞を読む習慣をつけることなど、学習活動への導入も積極的に行っていく必要があるだろう。

個人的な印象としては、スタンダードとして示されたカリキュラムを消化するだけで手一杯であった。効果的な教材提示、効率的な授業運営といった側面からは教授技術上の課題が浮かび上がるが、単なる技術的な改善のみにとらわれるのではなく、ソーシャルワークを学ぶ入り口に「心理学」が位置することの意義を今後もより明確にさせながら、伝えていきたいと思う。

文献

日本社会事業学校連盟 2003 社会福祉教育年報 第23集

岡村達也 1995 カウンセリング学習における体験学習のラショナルーカウンセリング学習における体験学習の諸問題（その1）— 専修人文論集, 57, 1-24.

佐治守夫・岡村達也・保坂亨 1996 カウンセリングを学ぶ 東京大学出版会